

AV JOURNAL

1991年3月 第20号



〈デジジョンルームにて〉

目次

“外大の将来を語る” 外国人教師による座談会 (第7回).....	2
学習における画像の利用研究.....第二部ドイツ語学科 乙政 潤.....	9
〈LL便り 1〉 テープ・ライブラリーの利用状況について.....	11
〈LL便り 2〉 映像資料 (レーザー・ディスク) 所蔵一覧 その7.....	16

“外大の将来を語る”

外国人教師による座談会 第7回

(1991年2月7日)

出席者

ウ・ミヤ ティン	(ビルマ語学科)	英語通訳
張 亜 軍	(中国語学科)	上 野 義 和
サイド, A. M. ハミス	(アラビア・アフリカ語学科)	斉 藤 隆 文
クーラス, ジェームス・エドワード	(英語学科)	視聴覚教育委員会委員長
バスケス ソラノ, クラウディオ・アントニオ	(イスパニア語学科)	溝 上 富 夫
ゲーラ, マルコ アントニオ	(ポルトガル・ブラジル語学科)	視聴覚教育委員会小委員
		上 神 忠 彦 (中国語通訳)
		郡 史 郎

溝 上: 「第7回外国人教師座談会をただ今から始めさせていただきます。2回目の出席の方もいらっしゃると思いますが、初めての方もいらっしゃると思いますので、最初に本学の簡単な歴史を私の方で説明申し上げたいと思います。本学は1922年に大阪外国語学校として創設され、当初は9つの語部から成り立っていました。つまり、中国語、モンゴル語、マレー語、印度語（ヒンドゥスターニー語）、英語、ドイツ語、フランス語、スペイン語、ロシア語です。1940年にアラビア語部が新設されました。1941年に太平洋戦争が始まりますが、「敵性言語」を教えるはならないという軍部の指導のため、「外国語学校」という校名が「外事専門学校」に改称されました。1945年の敗戦の年に、ビルマ語部が新設されています。終戦後の1949年、学制改革にともなって、他の専門学校や旧制高等学校と同じく、本学は「大阪外国語大学」という名称で大学に昇格いたします。他の学校と合併せずに単独で昇格したことが特徴です。英語の校名も Osaka University of Foreign Studies となりました。単に語学だけをやるのではなく、外国のことを広く研究するという理念ができました。この年、早くもタ

イ語学科が設けられ、その後高度成長経済をとげた1960年代に新設学科の数が飛躍的に増大いたします。すなわち、ペルシャ語学科（1961年）、朝鮮語学科（1963年）、イタリア語学科（1964年）デンマーク語学科（1966年）というわけです。量的拡大は1965年に二部（5年制）を生み、又、1968年には大学院修士過程が設置されました。1977年に、ベトナム語を設けて、タイ・ベトナム語学科ができ、1979年に、ポルトガル・ブラジル語学科が新設されました。又、この年、狭くなりすぎた大阪市内のキャンパスから、現在のこの箕面市に移転いたします。その後も、日本語学科（1987年設置）、デンマーク語学科（1966年設置、1985年デンマーク・スウェーデン語学科と改称）、アラビア・アフリカ語学科（1988年改称）というふうに新設又は改組が行われます。移転後、女子学生の数が急増し、現在では7割以上の学生が女子学生であるのも大きな特徴です。戦前は男子のみの学校でありましたし、戦後女子の入学を認めるようになってからも、女子学生の数は当初は一割にも満たなかったものです。現在、本学は学生数約4千人という、一学部（単科大学）としてはや

や大きくなりすぎたきらいがありますので、将来は複数学部に分けることが考えられており、又、学科間のいわゆる「壁」を取り払う「グルーピング化」という構想もあります。このように、本学は多くの問題点を抱えていますが、基本的に外国語を学び、教えるところであることはまちがいありません。そこで、まず最初に、各先生方に、先生方のお国に、この大阪外国語大学のようなインスティテュートがあるのかどうか、あるとすれば、どういう点がちがうかを本学で教えられた経験をもとにお話し頂きたいと思えます。まず、中国語の張先生は北京語言学院で先生をなさって、またイタリアやオーストリア等で外国人に中国語を教えるという豊富な経験をもっていらっしゃる方だそうです。北京語言学院については、私も非常に有名な程度の高いところだときいておりますけれども、簡単に大阪外大との違いを説明していただけますでしょうか。」

張：「おほめいただいて恐縮です。まず、このような会を開いて私をご招待くださったことをうれしくまた光栄に存じます。以下、自分の意見を述べたいと思えます。私は中国から日本にまいりましたので、隣近所のつきあいとして遠慮なく申しあげます。

北京語言学院はもっぱら外国人留学生を教える学校で、現在百余りの国から千人以上の学生が来て学んでおります。また、私は以前ローマ大学で4年間、ウィーン大学で2年間外国人学生を教えておりました。したがって、私はこの大阪外大の学生達と他の外国人学生を比較できるわけです。私は一般的に言って、大阪外大の学生達のレベルは比較的高いと思えます。もちろん、日本人学生には有利な点があり漢字学習が容易です。しかし、その日本人学生一般にも弱点があるのですが、私は大阪外大の学生には次のような優れた点があると思えます。

まずひとつは、大阪外大の学生は発音が比較的良いことです。日本語と中国語の発音はずいぶん違いますから、日本人一般にとっては中国語の発音は難しいのですが、この点大阪外大の学生達は比較的、優れています。他国の、たとえばヨーロッパの学生達に比べて一般に比較的優れているといえます。

第二に、文法を比較的よく理解していることで授業中、学生が話す中国語には文法的誤りが割合少なく、これも優れている点です。

第三に、学生達の中国語運用能力が比較的高いということです。これは中国が地理的に近いところにありますので、長期短期さまざまな形で中国へ行く学生が多くなり、そのような学生達の話す、聞く能力が高くなっている関係かもしれません。

したがって、全般的な印象として、大阪外大で教えている学生達はやはり、比較的高水準であると云えると思えます。その他に、仕事を通じて感じたことを述べたいと思えますが、それは教材の問題です。現在大阪外大で使っている教材は基本的には北京語言学院のものが多く、これらはだいたい1980年頃編まれたものであり、それは70年代の研究の成果というべきものです。」

溝上：「まことに申し訳ございませんが、その問題はまた後でご議論いただきたいと思えます。まず初めに、各先生方のお国で、外大に似たインスティテュートがあるかどうか、もしあればどういう点が似ているか、もしあればどういう点が違うかということをお伺いして、その後で教育法等各論に入りたいと思えます。それから張先生、外大の学生の弱点としてはどのような点をお感じになりますか。」

張：「私を感じますのは、学生達が学習上で、あまり活発でない点で、考え方がやや固苦しく、ヨーロッパの学生達のように自由闊達ではないのです。」

溝 上：「別の言葉でいえば、Passive という
ことでしょうか。」

張 　：「受身的、そうです。学生達は少しそ
ういう傾向があって、これはあるいは、先
生について一步一步学ぶという、日本の
伝統的な教育法に慣れてしまっているか
らかもしれません。」

溝 上：「ありがとうございました。この教育法
については、また後でおうかがいするこ
とにして、つぎにビルマ語のウ・ミヤテ
イン先生。

私もヤンゴンにはほんのしばらく滞在
したことがあって、ヤンゴン外国語学院
というのをみたことがあります。おそらく
そこがミャンマー最大の権威ある機関
だと思いますが、そこと外大の外国語教
育を簡単に比較して述べていただけませ
んでしょうか。」

ウ・ミヤティン：「最初にこの会にお招きいただいたこと
を感謝いたします。

ヤンゴン大学は少ししか知りません。
というのは、18～20年位前に日本人を含
む外国人にビルマ語を教えたことがあり
ますけれどもそれ以来、そこでは教えて
いませんので詳しいことは知りません。
それで私の興味があるのは次の二つにつ
いてです。一つは教え方をどうするかと
いうことです。教え方には、二通りある
と思うのですが、一つは翻訳方式
であり、もう一つは直接言葉を使って教
育することですけれどもどちらが
いいのか私は考えているところです。



もう一つ私が興味があるのは、ティー
チングエイズ—教育補助教材が、外大に
あまりないということで、そのことをどう
したらいいか困っているところです。」

溝 上：「ありがとうございました。タンザニア
のサイド先生、日本ではじめてのアフリ
カ語学科、アフリカ専攻を有する大学の
客員教授ということで、おそらく張りき
って来られたと思うのですが、お国には
外国語を専門に教える大学はありますか、
ある場合はどのような状況になっていま
すでしょうか。」

サイドA.：「アフリカのザンジバのswahili語教育
M.ハミス 機関で教えたことがあります。それから
ケニアのナイロビでも教えたことがあり、
ドイツでもswahili語を教えました。イ
ギリスのヨークシャーでも教えたことが
あります。私は外大に来てまだ4カ月間
にしかありませんので詳しいことは分か
っていません。それで私の教育効果につ
いても、まだどうであったか云えません。
しかし4カ月でいえることは外大の学生
はswahili語をしゃべるのが非常に遅い
ということです。おそらく、なかなかしゃ
べらないということだと思います。け
れども主な違う問題は、外大の学生が恥
ずかしがりやで、話を無理やりさせよう
としてもなかなかしゃべらないことです。
外国で私が教えたときは、もっと学生は
しゃべることに熱心で、たとえ間違いを
直されてもよくしゃべるのですが、外大
ではしゃべらない、今これはなぜだろう

というふうに、考えています。

外国語をしゃべれない一つの理由は、彼らに機会がないということです。外では、日本語しかしゃべれないわけですから仕方がないことかもしれません。しかし教師としては、できるだけのことをしてしゃべらせなければならないと思っております。

書くことに関しては、学生は、非常によく出来ると思います。一つの理由は、スワヒリ語は、発音体系が日本語に非常に近いことだと思います。それは、ひとつの過程です。教材に関しては、使用目的がはっきりしないということが問題だと思います。教えるガイドラインがはっきりしないということです。何故ここで、スワヒリ語を教えているかということがはっきりしていないわけです。

学生が外国語を学ぶ目的は、いろいろ考えられますが、それがはっきりしないということだと思います。一つはスワヒリ語は、英語と違って標準語が確立していないということだと思います。スワヒリ語は、今まさに、研究されつつある言語ですから、英語とはずいぶん違うと思います。私が強調したいことは、教えるための教材がないということです。この大学にはAV教材がたくさんありますが、スワヒリ語に関するものは一つもないということです。いまあちこちの教材を使って教えているところで、この大学自身の教材を持つべきことが大事だと考えています。私が興味をもっているのは、絵を使って教えるということで絵に関して書かせたり、絵に関して話させたりするということです。私は画家ではありませんので、絵を書くことは、むずかしくそういう補助教材がたくさんあればと思います。」

溝 上：「私、お三方に一貫して、それぞれのお国における外国語教育の事情が外大と比べてどうかということをお聞きしているわけですが、どうも設問自体に無

理があったように思えてきました。と申しますのは皆様方は、外国人に対するそれぞれの母語の教育のご専門家です。しゃべりますから、いってみれば本学の留学生別科の先生方と同じ土俵になるわけですね。後半は、サイド先生が外国語教育のことも、ちょっとお触れになりましたけれども、皆さん方は、ちょうど留学生別科あるいは日本語学科のスペシャリストのカウンターパートであられるわけで外国語を専攻とする我々とちょっと違いますので、質問に無理があったかもしれません。

ティーチングメソッドについては又あとでおたずねします。クーラス先生におたずねしますが、私は先ほど、本学は戦前は、Osaka School of Foreign Languagesであったのが戦後は大学になってから University of Foreign Studies と名前が、変わったと云いましたが、外大が地域研究をめざすという方向は正しいとお考えでしょうか。」



クーラス：「この会にお招き頂いたことに、深く感謝します。Osaka University of Foreign Studies という名称は正しく、外大の進もうとしている方向も正しいと思います。基本的な語学力に加えて、さまざまな文化や社会の価値を教えることはとても重要だと思います。私は、アメリカ英語だけでなく、その背景となっている文化も教えています。同僚の皆さんの話を聞いていて、私がラッキーだと思っ

たのは、英語に関してはA V関係の教材が豊富にあることです。本もいっぱいあります。もう一つラッキーなことはここに入ってくる学生がそれ以前に6年間の基本的な英語教育を受けているため書く能力や読む能力が非常に優れているということです。あとは、この大学にはいついかに恥ずかしいという感情をおさえ話をさせるかということ、それさえ克服できればあとはもう私にとっては、ほとんど苦痛のない楽しい経験ばかりといえるのです。

溝 上：「それではバスケス先生にチリでは外国語教育がどういう状況か、もしお分かりでしたらお話し願えませんでしょうか。」

バスケス：「私もこの会に招かれたことを感謝します。私の国の事情と日本とを比較しますと、外国語を学ぶ目的に関しましては私の国では職業を得るために学んでいるわけで、日本ではどうもそうではなくて専攻と無関係な職業につく学生も非常に多いですから特に目標のない目的のために学んでいると思います。教授法に関しましては日本ではひとつひとつの科目が孤立して教えられていてそこに相関関係があまり見受けられないように思われます。文法は文法、音声学は音声学として別々のものとなっていて、それぞれの相互の関係がみられないと思います。私の国ではそうではありません。私はここでは会話を教えていますけれども、私の国で行われている教育では、科目単位で学生に試験をするのではなくて学科単位で学生に試験をし、年間8回試験をします。そして、学科の先生方の前で学生がその言葉を使えるかどうかということ、これを試験するのです。そこでは、学生は即座に先生の質問に答えなければいけませんし、またその学んでいる外国語で質問しなくてはなりません。そういうやり方をしています。もうひとつ付け加えたいことは、学生に質問したところ外国人学生ともっと交流できる場がほしいという

ことでした。もっといろいろな機会をつくって外国人と話せるということが、もっと外国語を話せる上で役に立つという学生の意見があります。」

溝 上：「留学生を専攻の授業に招くというのは私がよくやっているのですが、インドの留学生を私の授業に呼んで来て学生と対話させるということは常にやっているのですが、双方のどちらにとっても利益があると思います。ただ留学生も非常に忙しくて時間がとれない、そういった授業にでるためには自分の日本語の授業を休まなければならないという制度的な問題があるようですが趣旨は非常にいいことだと思います。」



それではポルトガル・ブラジル語学科のゲーラ先生、やはりブラジルでは外大に似たようなインスティテュートがあるのでしょうか、あるとすれば外国語教育は外大と比べてどのようになっているでしょうか。

ゲーラ：「私が申し上げることは、ほとんど皆様がおっしゃったことをくりかえすことになるかもしれませんが、私の大学であるサンパウロ大学では、ことと同じようにいろいろな言語が教えられています。西洋言語、ラテン言語、アングロサクソン言語、アジア言語、古典ギリシア・ローマ言語もあります。この大学との主な違いは、私の大学では、学生が大学に入る場合、未来の職業と非常に強い結びつきをもっていること、学生は、

そこで専攻したことをかならず将来自分の職業に生かすようになるわけです。それが学生の学ぶ動機の違いとなってあらわれていると思います。

ここでは、ある学生は、翻訳をしようとするために入るし、ある学生は通訳をするために勉強しようとするわけですから、彼らは、できるだけ多くのことを学ぼうとする動機をもって入ってくると思います。たとえば、サンパウロ大学の日本語学科では、学生は初めから日本語を知りませんので言語を学ぶと同時に、現在の日本の社会についても勉強したいという希望をもっています。ところが日本では、学生は学んだ言語を最初にやって



も使えないことが多くて、4年間が無駄になってしまうことが多いようです。

それから教授法に関して学生は恥ずかしがりであるし、それから補助教材についても同じことがいえます。日本の大学高校に問題があると思います。日本では、書くことと読むことを中心に教えていますのでそれについては良いのですが、話すことについては訓練されていないせいかなかなかできないようです。とくに辞書が好きで辞書を神様のように扱っているということは、言語を使う上で壁になると思います。ブラジルでは、どんどんしゃべり、学んでいる言語を使って話し学んでいるのもっとしゃべることに関しては、効果的な指導法ができています。

女子学生の方が男子学生よりもよく勉強するということがそれは将来職業をもつ際に情勢が女子学生のほうが比較的厳しいということがあるかと思っています。一般的なお話をいたしました。」

溝上：「いくつかの非常に顕著な特徴が明らかになりました。そのうちの一つは外大の学生に限らず日本の学生は恥ずかしがりやでなかなか話そうとしないとこれはずっと前から多くの外国人教師によっても指摘されているわけです。けれども、先ほどクーラス先生は羞恥心を克服しさえすれば教師としては非常に楽でもう後はなんの問題もないということをおっしゃいましたが教師の側から学生の羞恥心をどのように克服されましたか。あるいはその秘訣はなんでしょうか。英語科の学生は多いですから、すべてが克服したとは思いませんが、うまく克服した学生がいたとすればそれは先生がどのようにされた成果でしょうか。他の先生方の参考になると思いますので、先生の経験談をお聞かせくださいませんか。

クーラス：「学生にどうして羞恥心を克服させるかということですが、学生は均一化されている社会ですので学生が同じような行動をしてしまって、なかなか話題など新しいものが芽生えないということが問題だと思います。それで私はそれを克服するために歌を歌って学生の間にいろいろな反応を呼びおこしたりしています。それから例えば食事の時間に私のところに来たりして、コーヒーを飲んで一緒にしゃべったりする機会をもつようにしています。

私がもう一つ気になるのは女子学生が男子学生よりできるということですが、それに関して不思議に思うのは、この大学では女性の先生が非常に少ないということです。もっと女子学生が大学院に行っても職につけるということをしっかり云ってやれば女子学生も大学院へ行って将来女性の先生が増える可能



性が多いのではないかと思います。西洋ではもっと女性の大学院生、大学の教師が多いわけですからそのところを考えてほしいと思います。

溝 上：「女性の教員が少ないということについてひとことお答えしたいと思いますが大阪外国語大学はこれでも国立の大学では女性の先生が多い大学のひとつです。

私が23年前就職したころにはほんの数名しかいらっしゃいませんでしたが、今は19名位いらっしゃいます。学科が20あるとすれば、おそらく半数以上の学科に女性の先生がいらっしゃると思います。そしてこれは公募ですから、能力さえあれば、誰でも応募できるわけですから、だんだん女性の先生の数は増えてゆくとおもいます。

外大の未来像ということで女性の教授の採用を増やすというのは有益なサゼスチョンだったと思います。それから教材のことについて議論が残っていたので、続けたいと思いますが、英語のように歴史のある学科ではいやというほど、有り余るほど教材があって選択に困るほどあるかと思えばスワヒリ語のように何も無い（しかし私の知る限りでは、宮本先生などお作りになっていらっしゃると思いますので、ゼロとは伺っていないのですけれども、）という語科もあります。先生がお越しになって日本人スタッフと共同でテキストを編纂されるというのは非常にすばらしいと思います。このこと

について、サイド先生一言おっしゃって頂ければと存じます。

サイドA.：「スワヒリ語の教材に関してですが、やはりひとつの方向を出すべきだと思います。今は方々の国から寄せ集めている感じですので、ひとつの方向を打ち出すべきだと思います。いま私の同僚から協力が得られていますので、それに関しては全然問題がないのですが、それを裏づける財政的な面で、スワヒリ語はいまちょうど研究を始めたばかりで、英語のように教材があるわけではありませんので現状のままでは問題だと思います。私は新



しい教材を作ろうという意志を強く持っており私はそれに関して援助が必要だと思います。教材は少しは入っているようですが、それは体系化されていませんので、授業に使えるかどうかは考慮されていないようです。授業をするためにビデオを使って教材をつくったりすることに意欲を燃やしています。」

溝 上：「まだまだ、これから先生方にもっと多くのことをお話し頂こうと思っていたのですが、時間がきてしまいました。司会者の不手際を心からおわび申し上げます。今後はもっと時間的に余裕のある形で、先生方から有益なお話を伺おうと思います。本日はどうもありがとうございました。」

学習における画像の利用の研究

第二部ドイツ語学科 乙 政 潤

1

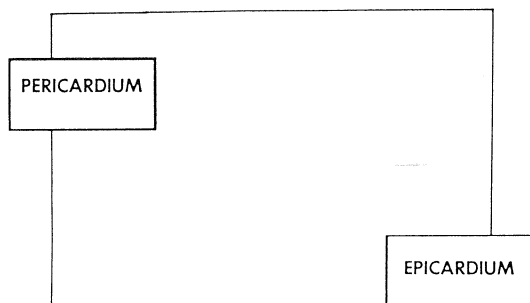
外国語の学習に限らずいろいろな学習において画像が利用されている。平行して、学習における画像の利用についてもさまざまな研究が行われている。

筆者の記憶に今も印象深く残っている研究の一つは、Dwyer, Jr. F. M. のイラストレーションの効果をもテーマとした論文である。それは、*Adapting Visually Illustrations for Effective Learning* と題して *Harvard Educational Review* に発表された(同誌Vol. 37, No.2 1967, p.250-263)。彼の主張を一言で言えば、イラストレーションを精密にすることが必ずしも学習の効率を高めることにはならないというもので、いわば視覚資料の「リアリズム」に疑問を投げかけるものであった。

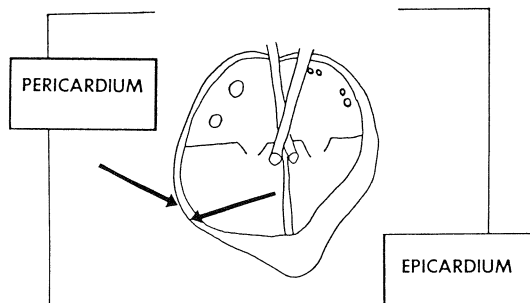
彼は、自分の勤め先のペンシルヴァニア州立大学の新生108名を使ってこの実験を行った。彼らを4グループに分け、そのうちの1グループをコントロールグループとした。各グループに人間の心臓についての「授業」を行い、心臓の各部分の解剖学上の名称と機能を教えた。すなわち、学生たちに録音テープを使った説明を聞かせ、それにシンクロナイズされたモノクロのスライドを見せた。ただし、スライドの各コマの形式はグループ毎に異っていた。第1グループはコントロールグループなので、スライドにも具体的な映像は一切使わず、各部の名称を文字によって示すに留まった。他の3グループには具体的な映像を用いて各部が示されたが、映像の「リアルさ」の程度が互いに異なっていた。すなわち、第2グループのスライドは線だけの略画であり、第3グループのスライドは陰影のついた「イラスト」であり、第4グループのスライドは写真であった。

「授業」のあと学生たちの理解度を試すテストがいくつか行われた。

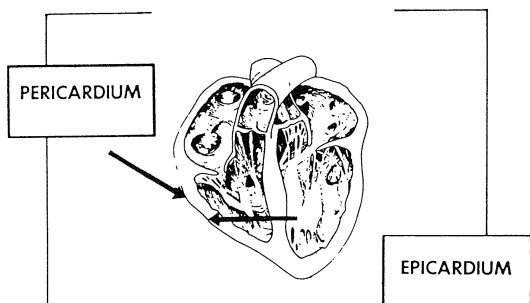
まず総合的な理解を試すテストでは略画グループが1位で、写真グループは最下位であった。次に、学生たちに心臓の図を描かせてみると、略画グループとイラストグループはほぼ同点で上位を占め、コ



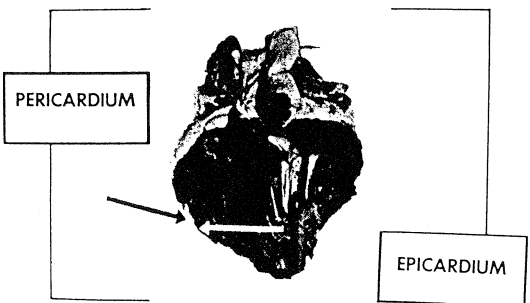
第1グループのスライド



第2グループのスライド



第3グループのスライド



第4グループのスライド

ントロールグループは最下位であった。ここでも写真グループは期待に反して最上位ではない。

学生の立体的握握の程度を測定するテストをしてみると、略画グループがトップであった。これに反して写真グループは最下位であった。彼らが術語をどれくらい覚えているかを試すテストでも、この順位は変らなかった。

最後に行われた、心臓やその各部の機能と機能している際の位置関係を理解しているかどうかを試すテストでは、略画グループとイラストグループはほぼ同点で上位に立ち、コントロールグループと写真グループがそれに続いた。

Dwyer は、これらの結果から、簡素なイラストが学習に際し最も効果を持つこと、および、口頭だけの説明もまた目的次第では（上の実験では、術語の理解と機能の理解）イラスト同様に効果的であることを結論したのであった。

2

しかしながら、学習という人間の活動にはさまざまな内的・外的要因がからんでいるので、学習の効果もまたそれらの要因の影響を受け易い。上越教育大学の北條礼子氏の英語テキスト理解における画像効果の研究では、画像を併用した方が画像を用いない場合よりも学習効果が高いという結果は出たものの、画像としては「線画イラスト」よりも写真の方が優れているという結論に達している（北條礼子：「外国語（英語）教育における画像の効果に関する基礎的研究」、日本視聴覚教育学会編『視聴覚教育研究』第19号,1989年,p.49-71）。

氏の研究は347名の中学3年生を被験者とし、英文テキストの内容理解と画像のかかわりを突き止めようとするものである。10グループに分けられた被験者は約250語から成る英文テキストを読ませられ、引き続いて内容理解を試すマークカード式のテストを与えられた。第1グループはコントロールグループで、英文テキストを読む際に画像の助けは全く与えられなかったが、他の9グループは読む前か読んだ後に画像を与えられた。

この実験的研究の特徴は、事後テストのほかに被験者にテキスト、テスト問題、画像についてのアンケートを行っていることである。その結果によると、写真併用グループはテキストの内容を「おもしろい

と感じ」ているし、テストにおいても「難しいと感じる割合が少なかった」。また、写真にせよイラストにせよ画像を与えられたグループのうち全体像を示された者たちの方が、画像の有用性を強く肯定している（テキストが「ショッピング・トレイン」に関するものなので、室内だけを示す画像よりも列車全体を示す画像の方が「列車」であることをよりよく分からせのは当然であったとも言える訳で、被験者がアンケートに真面目に答えている証拠であるとも言える）。

同じ号に、英語の前置詞の学習における画像の効果の比較研究が載っている（浦田俊之、中野照海：外国語（英語）学習における画像の効果の基礎研究—英語の前置詞の学習における文字と文字・画像併用との比較効果について—,p.73-90）。これは私立高校1年生男子127名を対象とした実験であるが、記事からは学習とテストの具体的な形式がよく分らないので、結論だけを紹介すると、この実験結果からは、(1)画像を併用した方が文字だけによる学習よりも効果があるという仮説も、(2)線画の方が写真よりも効果があるという仮説も、ともに棄却されている。つまり、「できる学習者は、どの学習方式でもでき、できない学習者は、どの学習方式でもできない」という結果であった。著者たちは、それに基づいて、画像を併用した学習は低成績の学習者には効果的であるという仮説も棄却されたとしている。

著者たちによると、学習の過程では、線画併用—写真併用—文字のみの順で平均点のあいだに差があったのに、事後テストでは平均点の順は文字のみで学習したグループ—線画併用グループ—写真併用グループとなった。そのため上記の結論に達した訳であるが、一方学習過程において写真や線画を併用した学習の平均点が高くなった現象を画像を用いた学習の持つ新奇性が学習者を刺激したのだと解釈している。われわれが学習における映像の効果を云々する場合に、学習者の認知力の向上という直接的な効果ばかりを目に入れることを戒める事象と言えよう。

3

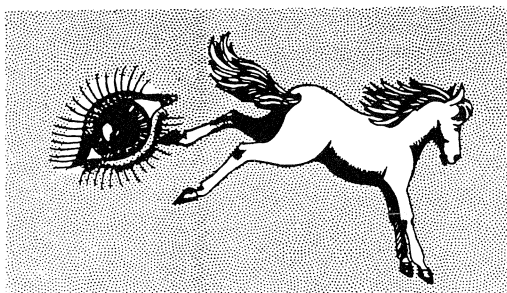
外国語を学習する場合にその語彙を習得することは必須である。そして、語彙の習得においては積極的に単語を記憶せねばならない。でなければ語彙はあまり拡大されず、したがって外国語の学習も

また大した進歩は見ないであろう。そのため、語彙の積極的な記憶には古くから工夫が凝らされて来た。Kennel (犬小屋) を「犬寝る」と言い換えたり、dictionary (辞書) を「字を引く書なり」ともじったのは単なる冗談だったのか、それとも何かの暗記法だったのか記憶は定かでないが、歴史の年号や平方根暗記にはこのような言い換えが有効な方法であることは否めない。その場合、言い換えが我々の脳裏に喚起する映像が鮮明なものであればあるほど記憶は強く保持される ($\sqrt{5}=2.2360679$ 「富士山麓鸚鵡鳴く」)。

『視聴覚教育研究』第20号(1989年)には、外国語の単語の記憶を強めるために音声と画像を利用することについて研究報告が載っている(浦田俊之、中野照海:「外国語(英語)学習における音声と画像を併用したキーワードの利用」,p.69-89)。

「キーワード」とは、学習外国語の単語の音節と似た音節を持つ母国語の単語(もしくは句)である。学習者はこの音節の音声的な類似による連合とイメージの連合とを二つながら利用して単語を記憶する。両氏の参照された R. C. Atkinson: Mnemotechnics in Second-Language Learning (American Psychologist, August 1975, p. 821-828) の例を借りると、スペイン語の caballo (馬) はほぼ“cob-eye-yo”と発音されるので、“eye”(目)が「キーワード」となる。図のように馬が巨大な目を蹴とばしている状況の不気味な「イメージ」が caballo の発音と意味を覚えるのを助ける。本来は学習者はめいめいに自分で「キーワード」と「イメージ」を作り上げるのであるが、この実験的研究では、実施者が作ったキー

ワードを与えている。さらに、キーワードのほかにイメージの連合を助ける音声や画像も与えている。(ただし、キーワードと画像がどのようなものであったのか報告には記されていない)。



実験は私立高校男生徒160名を対象として、英単語64語について行われた。著者たちの記す結論をかいまんで紹介すると、「キーワード」法は、音声や画像を併用して学習者がイメージを作り上げるのを助けるならば、効果を発するらしい。また、動詞をはじめとして具象的な意味の名詞の記憶保持には「キーワード」法は有効であった。逆に、抽象名詞や形容詞については効果が認められなかった。

この結果からどういう教訓を引き出すかは別として、外国語の単語の記憶の強化に使われている画像の働きに注目したい。画像はイメージの連合によって記憶を助ける目的で使われるのであるから、その内容が単語の意味そのものを描いていることはあり得ない。われわれの単語記憶を助けているのは画像そのものではなく、画像がわれわれにもたらすイメージなのである。画像の効果を研究するとき、これは忘れてはならない事実であると思う。

〈LL便り1〉 テープ・ライブラリーの利用状況について

(1990年4月～1991年2月)

今年度のテープ・ライブラリーの利用状況を紹介します。

まず、映像資料(ビデオ・LD)の利用人数ですが、前年と比較して、2月以外の全ての月で増加し、全体を通じて約3000人の増となっています。(グラフ①参照)各語学科においても、音声資料(カセットテープ)と比較して、映像資料の利用率の高さが目につきます。(グラフ②参照)

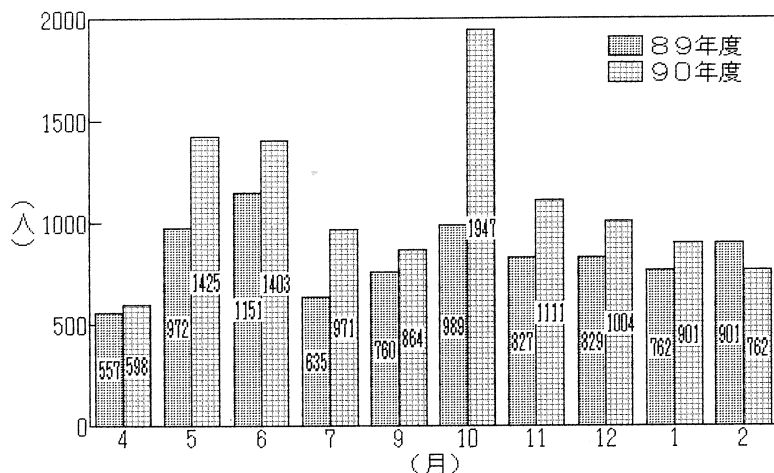
次に、資料の内容別にみると、例年のことながら、映画の利用は多いのですが、89年10月からサービスを実施しているワールド・ニュース、アジア・ニュースの利用が非常に多くなっています。(表①②参照)これらのニュースは、リアルタイムに近い状態でオリジナルの言語で視聴できるので、語学学習には非常に効果的だと思います。

テープ・ライブラリーでは、その他、語学、一般

教養、音楽等の映像、音声資料をたくさん所蔵して
いますので、多に利用して下さい。

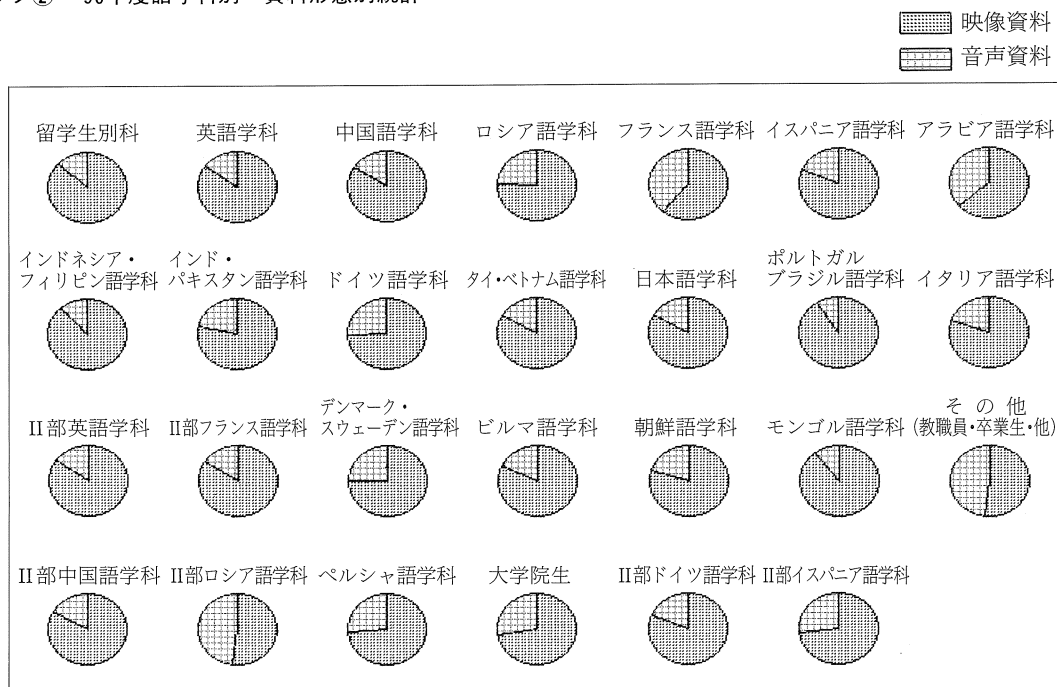
尚、現在音声資料の再分類を実施しています関係
上、音声資料の前年比較統計は省きました。

グラフ① '89・'90年度映像資料月別利用者数

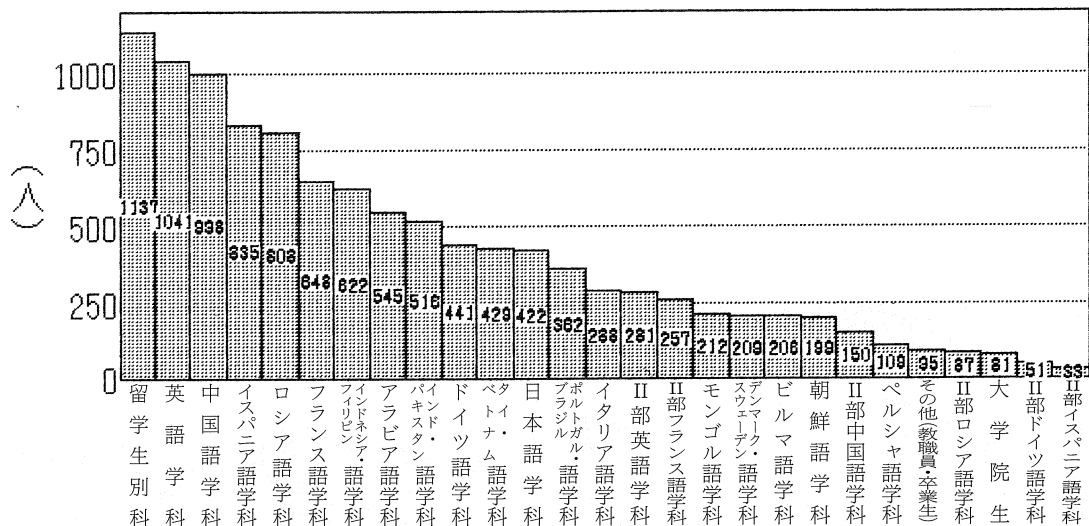


	89年度	90年度
4月	557	598
5月	972	1,425
6月	1,151	1,403
7月	635	971
9月	760	864
10月	989	1,947
11月	827	1,111
12月	829	1,004
1月	762	901
2月	901	762
合計	8,202	11,062

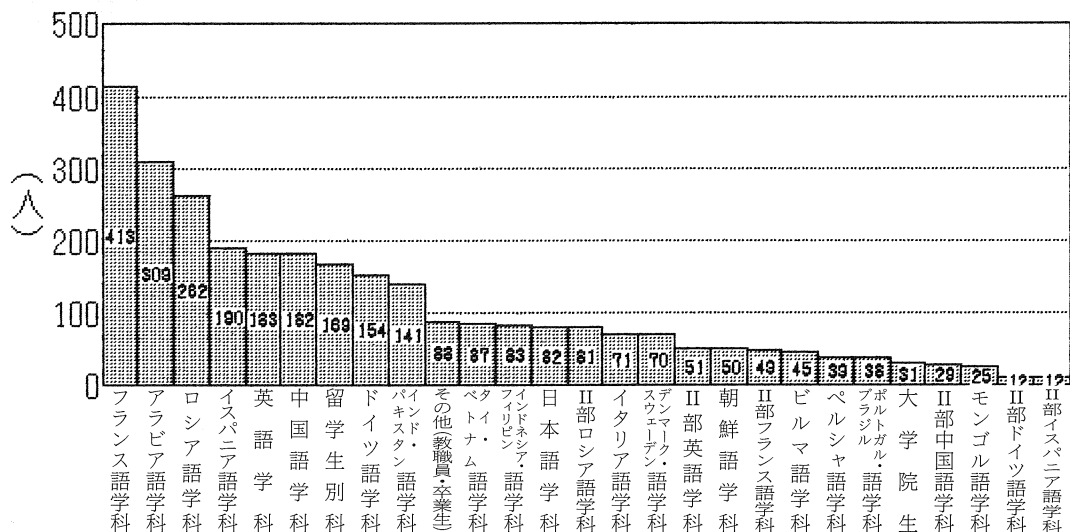
グラフ② '90年度語学科別・資料形態別統計



グラフ③ '90年度映像資料語学科別利用者数



グラフ④ '90年度音声資料語学科別利用者数



表① 90年度映像資料（映画）利用ベスト20

資料名	利用回数	資料名	利用回数
1. ダイ・ハード	157	11. 存在の耐えられない軽さ	80
2. レインマン	146	12. 眺めのいい部屋	78
3. メジャー・リーグ	125	12. 12人の怒れる男	78
4. シャーロック・ホームズの冒険	117	14. バック・トゥ・ザ・フューチャー	76
5. 告発の行方	114	14. マイ・フェア・レディ	76
6. 愛と青春の旅立ち	100	16. スタンド・バイ・ミー	74
7. 八月の鯨	97	17. トップガン	63
8. ローマの休日	93	18. 友だちの恋人	62
9. セント・エルモス・ファイアー	84	19. ロジャー・ラビット	61
10. ティファニーで朝食を	83	20. グリース	59



(ダイ・ハード)



(レインマン)



(メジャー・リーグ)

〈それぞれレーザー・ディスクよりコピー〉

表② 90年度映像資料（一般教養）利用ベスト20

資料名	利用回数	資料名	利用回数
1. ワールド・ニュース	831	11. アフリカの巨峰 キリマンジェロ	5
2. アジア・ニュース	159	11. Fodbold '82	5
3. シルクロード 第1部	22	11. NHK Japanese：日本語講座	5
4. 英語についての9章	16	14. Video English	4
5. 世界民族音楽体系	15	14. サバイバル・イングリッシュ	4
6. シリーズ「アフリカ」	9	14. フランス人の身ぶり入門	4
7. 目で見るフランス語発音入門	7	17. 日本語教育映画	3
8. 天安門・激動の40年	6	18. タイ・テレビニュース	3
8. 英語は度胸	6	18. モスクワ・ニュース	3
8. 南アフリカ—太陽の汗・月の涙—	6	18. ベルリン —引裂かれた街に生きる—	3

表③ 90年度音声資料利用ベスト20

資料名	利用回数	資料名	利用回数
1. Basic spoken French	252	11. Dans un petit village de Normandie	21
2. Japanese for today	66	12. Practice tests for TOEIC	20
2. Elementary modern standard Arabic	66	13. Je taime	18
4. 英検サクセスカセットブック	62	13. Basic spoken Spanish	18
5. Intensive spoken French	44	15. РУССКИЙ ЯЗЫК ДЛЯ ВСЕХ	17
6. 目で見るフランス語発音入門	41	16. Living American English series	15
7. 英検カセットブック	33	17. エクスプレス・ポーランド語	14
8. 初級漢語課本	30	18. ロシア語通訳プロ入門	13
9. Entre libre	29	18. Introduction ti Egyptian Arabic	13
10. 新英会話教本	22	18. 英検1級ヒアリング既出問題カセット	13

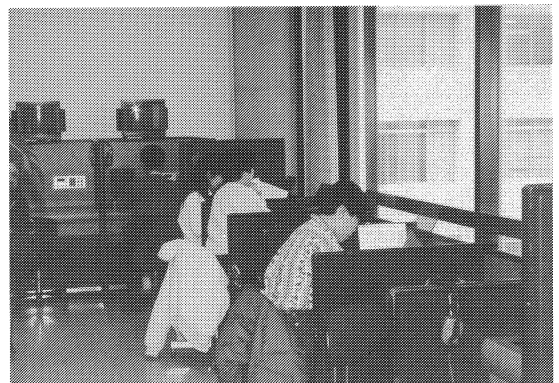
◆月別、テープ・ライブラリー開館日数◆

90 / 4	5	6	7	8	9	10	11	12	91 / 1	2	3	合計
15 日	21 日	21 日	22 日	夏期 休暇	19 日	22 日	17 日	15 日	18 日	19 日	11 日	200日



(3 F テープ・ライブラリー)

(4 F 映像資料送出装置)



<LL便り2>

新規購入映像資料（レーザー・ディスク）所蔵一覧

その7

(1991年2月現在)

資 料 別	音 声	所要時間	資料番号
The color purple (カラーパープル)	(英 語)	2'33"	E-0477
Une vie (女の一生)	(フランス語)	1'25"	F-0135
L'étudiante (スチューデント)	//	1'04"	F-0136
poil de carotte (にんじん)	//	1'31"	F-0137
Notre-Dame de Paris (ノートルダム・ド・パリ)	//	2'00"	F-0138
Mylene Farmer (ミレーヌ・ファルメール)	//	0'49"	F-0139
Travelling avant (パリを追いかけて)	//	1'54"	F-0140
Quatre aventures de Reinette et Mirabelle (レネットとミラベル 四つの冒険)	//	1'35"	F-0141
La lectrice (読書する女)	//	1'39"	F-0142
La leggenda del Santo Bevitore (聖なる酔っぱらいの伝説)	//	2'09"	F-0143
L'amour en douce (優しく愛して)	//	1'31"	F-0144

編 集 後 記

◆ Audio Visual Journal 第20号をお届けします。
今号は、外国人教師による座談会を特集しました。今回のテーマは、今までの「外国語教育について云々」から「外大の将来を語る」に変わりましたが、盛んに意見の交換なされました。

◆1990年度のテープ・ライブラリーの利用統計を紹介しました。利用者は年々増加の傾向にあり、資料の視聴にあたり、待ち時間もでているのが現状です。今後、関係各位の協力のもとに、早急に施設の充実を計りたいと考えています。

AV Journal 一第20号一

1991年3月15日発行

編 集 大阪外国語大学視聴覚教育委員会
附属図書館視聴覚資料係
発 行 大 阪 外 国 語 大 学
印 刷 株 ム ラ タ 印 刷